



特集

明治から続く地域の絆を深める伝統芸能

実りの秋、年に一度の晴れ舞台——いずみ きと泉郷獅子舞保存会

「北海道のジオパーク」構想 大雪山カムイミンタラジオパーク構想
〔旭川市・鷹栖町・東神楽町・当麻町・比布町・愛別町・上川町・東川町〕

ほっかいどうの本 『坂本先生とさわこの母』 北海道新聞社
『命を守る 防災ふろしき』 中西出版
『日常にある色 色の自然誌』 共同文化社



子どもの厄除けに噛みつく獅子



迫力ある泉郷獅子舞の演舞



大勢の観衆の前に披露された泉郷獅子舞



舞の前に参拝する保存会のメンバー



討ち取られる寸前の獅子

特集

明治から続く 地域の絆を深める伝統芸能 実りの秋、年に一度の晴れ舞台——

いずみ さと 泉郷獅子舞保存会

千歳市の泉郷地区で、明治の時代に北陸地方から伝わり、120年以上にわたり住民が地域の誇りとして受け継いできた伝統芸能が「泉郷獅子舞」です。1979年10月には、千歳市の無形文化財第1号に指定されています。体長5mほどの獅子が巨体をくねらせ、飛び跳ね、食らい付こうと迫る姿は圧巻です。2024年は9月22、23の両日、地元の秋祭りで、勇壮な舞が披露されました。1961年に発足した泉郷獅子舞保存会(以下、保存会)の松原敏幸会長はじめ会員の皆さんに、これまでの活動の歩みや獅子舞の特徴、魅力などを聞きました。

(文・写真/片山健一 取材日2024年9月2、20、23日)

泉郷獅子舞のルーツは 富山方面に

国内外から年間2千万人以上が利用する北海道の空の玄関口・新千歳空港があり、次世代半導体の製造拠点を建設でにわか活気づく千歳市。

その中心部から北東へ車で十数分、田畑が一面に広がる泉郷に着きます。剣淵川が流れ、樽前山噴火による火山礫混じりの原野に1887年、開拓の槌音が響き、やがて豊かな農村地帯の泉郷となり、1896年ごろから獅子舞を踊るようになってとされています。

保存会では、1977年から3年半をかけて、泉郷獅子舞の起源や伝承経路などを探る調査を行いました。地元や長沼、札幌、室蘭、小樽などの道内で獅子舞のある地域のほか、富山県や岐阜県も訪れ、記録や証言を集めました。

1981年発行の『泉郷獅子舞調



泉郷獅子舞保存会の松原会長

査報告』によると、泉郷獅子舞の原形は、富山県南西部で石川県と接する砺波地方南部の城端町、福光町、岐阜県北飛騨の五箇山地方に分布しているもので、山城鶴次郎という富山県出身の開拓民が、泉郷に持ち込んだとの見方が有力と、まとめています。

泉郷獅子舞は、全長約5m、幅約2mもある獅子で、獅子頭を持つ「頭持ち」が1人、「蚊帳」と呼ばれる胴幕を半円形に保つためのアーチ状の竹ひごを持つ「竹持ち」は、「一番竹」が1人と「二番竹」「三番竹」「四番竹」は左右2人1組で並び、一番後で尾を振る「尾持ち」1人の計9人の「蚊帳持ち」で構成します。

こうした形状は、胴幕の中に大人数が入る北陸地方独特の百足獅子と呼ばれるもので、曲のテンポが早く活発な動きを見せる「氷見獅子」の特徴と、胴幕にアーチ状の竹ひごを入れて、1本の竹を2人で支える幅の広い胴の形状は石川県に伝わる「加賀獅子」の特徴を、それぞれ受け継いでいるとされています。

2001年に改めて富山県などで調査を行った松原会長は「時代とともに踊り方や太鼓の調子も変化して、富山県や石川県にも泉郷と同じ踊りはありませんでした。それぞれの地域で独自に進化したのでしよう」と話します。



巨大な獅子が獅子取りに迫る

獅子頭や道具も 富山製で

泉郷の獅子頭は、現在のものでも四代目になりますが、初代から全て保管されています。いずれも角がない「雌獅子」です。

初代の獅子頭は、泉郷に多く自生していたカツラの木を材料に彫り込んだものらしく、漆塗りをしていない白木のままで非常に重いものでした。

1955年ごろに、傷みの激しくなった初代の獅子頭を千歳神社に奉納し、二代目の獅子頭を新調しましたが、一人獅子用の小さなものでした。

1978年になって、初代に似せた三代目となる獅子頭を富山県井波町の彫刻師・荒井寿斉に約10カ月か



歴代の獅子頭（左から初代、二代、三代、四代）
(泉郷獅子舞保存会提供)

けて制作してもらいました。材木は、富山県内の獅子頭と同様、軽い桐の根元付近を使い、漆塗りで仕上げた立派な獅子頭となりました。

四代目の獅子頭は2001年に、三代目と同じ工房に制作を依頼しました。2019年には漆の塗り替えを行いました。獅子頭だけでなく、巻き毛模様とボタンの花が染め抜かれた胴幕も、富山県の染め物会社で制作したもので、笛も富山県で買って来たものを使っています。

伝統の舞と独創の 「天狗の舞」

泉郷獅子舞には、「七五三の舞」と「八五三の舞」という古くから伝



槍を持った天狗が飛び跳ねる天狗の舞

わる踊りと、1978年に保存会が創作した「天狗の舞」の3つの踊りがあります。

蚊帳持ちはそろいの衣装で、白い半股引、青色の半纏、豆絞り柄の鉢巻、足袋に草鞋、膝下までの黒い前掛けを身に付けます。頭持ちは、約4キある獅子頭を両手で持ちつつ、蚊帳の中で「ほっ」「はっ」と声を掛け合い、一糸乱れぬ足の運びで跳ねながら、「食い付き」の一瞬に呼吸を合わせます。竹持ちは胴幕がたるまないように竹を保持し、左右に動かすことで獅子の息遣いや躍動を表現します。尾持ちは全体的な胴体の張り具合を調整しつつ、尾を旋回します。

七五三の舞や八五三の舞で獅子を退治するのが、「獅子取り」です。派手な着物ともんぺ姿で、顔に化粧



花棒で獅子を攻撃する花持ち

を施した「花持ち」は、半紙で作った花が付いた棒で獅子を操ります。天狗の舞では天狗の面を被り、槍を持って獅子と対決します。

いずれの舞も、太鼓役1〜2人、笛役1〜3人で構成する囃子方の演奏に合わせて、食い付こうとする獅子を獅子取りが巧みにかわしながら、花棒や槍で攻撃して獅子を弱らせ、急所である鼻への一撃で倒すまでを表現した演舞となっています。

七五三の舞は、花持ちが獅子に正対したり背を向けたりする形で踊りますが、八五三の舞は、花持ちと獅子が横向きで舞う形を取るため、観客は花持ちと獅子の表情を同時に見ることができません。天狗の舞は、獅子と対峙した天狗が前後左右に飛び跳ねるため、最も激しい踊りとなっています。

泉郷獅子舞の盛衰

若者たちが軍隊に召集された第二次世界大戦中や戦後の混乱期にかけては、泉郷獅子舞は踊り手がいないため中断していましたが戦後の1950年に再開を果たします。1961年には泉郷地区の全戸が会員となり、泉郷獅子舞保存会が発足しました。しかし、若者の参加が減少し、1970年代前半には獅子舞が見られない時期もあったそうです。

1976年になって地元若者たちが郷土芸能を見直そうと、下火となっていた保存会活動のでこ入れを図りました。1979年には市の無形文化財に指定され、獅子舞が再び盛り上がりを見せるようになりました。

松原会長は、明治時代の1903年から続く「松原温泉」の跡を継ぐため、泉郷に戻ってきた1993年の秋に、先輩に誘われて初めて獅子舞を踊りました。「子どもの頃は興味がなかったのですが、難しそうな舞も、踊ってみると楽しかった」と獅子舞の魅力に引き込まれ、3年後の1996年には保存会の三代目の会長を引き受けました。

現在、獅子舞を披露する機会は秋の例大祭の時だけです。かつては

「企業の創立記念日などの余興で出演していたようですが、本業が忙しい人が多いので、依頼は全てお断りしています」（松原会長）。

新型コロナウイルス感染症が蔓延していた2020年と2021年は、獅子舞は披露できませんでしたが、それ以外は大きなトラブルもなく、保存会の活動には10代、20代の若者を含む30〜40人が常時集まります。近年は泉郷の住民だけでなく、地区内の事業所で働く従業員も参加するようになりました。72歳になった松原会長は「若い世代も参加してくれて、世代交代も進んでいます。あとは早く会長を引き継いでもらえれば」と話します。

3日間の練習と2日間の祭りが絆深める

毎年9月に開く泉郷神社の秋季例大祭で、五穀豊穡、無病息災、家内安全を祈願して泉郷獅子舞を奉納します。田園地域の鎮守の森に、太鼓と笛の音が響き、大きな獅子の姿を現すと、祭りの盛り上がりは最高潮に達します。ことし9月23日に行つた本祭りでは、保存会のメンバーが6回の舞を披露し、約2000人の観衆から拍手喝采を浴びました。

この日のために地域住民は、小高



頭持ちの指導をする遠藤さん(左)



公民館に併設される
体育館での練習の様子



地区内の家の前で舞う「全戸回り」
(泉郷獅子舞保存会提供)

い丘に建つ泉郷神社の境内の雑草を刈り、収穫コンテナに板を渡した簡易な座席を設け、肉や野菜を焼くバーベキューコンロ、ビールサーバー、くじ引きの景品などを持ち寄ります。「まさに住民総出による手作りの祭りです。この雰囲気がいんですよ」と松原会長は顔をほころばせます。

保存会は、祭りが開かれる3日前から全体練習を行います。メンバーは仕事を終え、夕食を済ませてから、練習会場となる千歳公民館泉郷分館へ午後7時過ぎに集まり始めます。胴幕のほつれた部分を修繕するなど準備をしながら、仲間が集まるのを待ちます。

館に移動して練習を開始します。笛の音や太鼓のリズムに合わせ、大きな獅子と獅子取りが小さな体育館の中を跳ね回ります。七五三の舞、八五三の舞、天狗の舞を1回ずつ踊ると、その日の練習は終了です。

練習後は、ビールを飲みながら先輩たちが、ことし蚊帳持ちを務める若者たちに、胴幕内の足の運び、胴幕の張り具合、獅子頭の向きや食いつき方などについて、細かくアドバイスを行います。「竹持ちや花持ちを10年やって、ようやく獅子頭を持たせてもらった」と言う74歳の先輩、遠藤満さんの指導は熱を帯びます。

本祭りの前日、保存会は地域内の住宅や事業所などを一軒、一軒訪問し、門付けで獅子舞を披露する「全

戸回り」を行います。軽トラックの荷台に太鼓や笛の囃子方が乗ったまま演奏し、舞が終われば次の訪問先へと移動します。松原会長は「近頃、顔を合わすことが少なくなっていた、おじいちゃんやおばあちゃんが玄関先に顔を出してくれど、ほっとします」と言い、地域の絆を確かめつつ、練り歩きます。

9月22日は午前8時から午後6時過ぎまでかけて、約40カ所を回りました。訪問先からは花(祝儀)や酒などが贈られます。花は保存会の運営資金となり、酒はその夜、前夜祭として深夜まで開かれる酒宴に持ち込まれます。

「北海道の伝承芸能を舞踊譜で保存する試み」として、科学研究費補助金により2011年9月に発行された『踊る、舞踊譜 北海道千歳泉郷獅子舞の事例から』(赤川智保、吉岡精一共著、岩川亜矢図版解説、共同文化社発売)には、道内各地の獅子舞を調査した結果、「地域のす



泉郷獅子舞の研究をまとめた
研究成果出版



頭持ちの大役を果たした河野さん

べての民家を一軒、一軒回って門付けする獅子舞はここ、泉郷獅子舞だけ」と記されています。松原会長は「昔は戸数をもっと多くて、リヤカーで獅子頭や太鼓などを運んでいたようだから、かなり時間がかかったでしょうね」と先人たちの奮闘に思いを馳せまします。

ことし初めて、頭持ちを担当した河野慎さんは、練習の時から先輩の助言に耳を傾け、撮影した動画を熱心にチェックしていました。本祭りでは、最後に踊る天狗の舞で頭持ちを務めました。「練習は1日1回しかできないので不安もありましたが、昨日の全戸回りでも確認しました。今日は、観客も大勢いて気持ちが高まりましたが、納得のいく獅子舞が披露できたと思います」と笑顔で話していました。

大雪山カムイミンタラ

ジオパーク構想



旭川市・鷹栖町・東神楽町・当麻町
比布町・愛別町・上川町・東川町

（文と写真・片山健一 取材日2024年9月27日）

変化に富んだ地形と地質が育む文化

大雪山と、その麓に広がる上川盆地には、上川アイヌの文化が息づき、明治期から開拓された街並みが形成されています。

旭川市、鷹栖町、東神楽町、当麻町、比布町、愛別町、上川町、東川町の1市7町は、変化に富んだ地形や地質があるこの一帯を「大雪山カムイミ

ンタラジオパーク」とする構想を描いています。

このジオパーク構想は、北海道中部で現在も活動を続ける「大雪山火山群」、山々を源に大小多数の河川が流れ、全国2番目の流域面積を誇る石狩川へと合流する「上川盆地」、約1億年前に地下深くで形成された変成岩類を石狩川の流が削った「神居古潭峡谷」からなります。

大雪山の恵みが魅力

北海道最高峰2291mの旭岳（東川町）や1984mの黒岳（上川町）など20以上の山々からなる大雪山は、約100万年前以降の火山活動により形成されました。旭岳中腹では噴気孔も見られます。大雪山では厳しい気候条件の中でも、ホンバウルツプソウなど固有種を含む高山植物、希少動物であるエゾナキウサギやウスバキチョウといった多種多様な動植物により生態系を形成しています。

大雪山に降り積もった雪は、河川の源となります。層雲峡（上川町）は、石狩岳（上川町、上士幌町）を源とする石狩川がつくった24キロにわたる大峡谷です。約3万4千年前の大噴火により



高山植物が咲き誇る旭岳



豊富な水と肥沃な土壌が人々の生活を支える上川盆地

噴出した火砕流が冷え固まり形成された柱状節理の断崖には、「銀河の滝」「流星の滝」などの滝が点在しています。層雲峡と同じ柱状節理が続く天人峡（東川町）でも、七福岩や羽衣の滝などの壮大な自然を望むことができます。大雪の山々から上川盆地へと流れ込む石狩川水系の河川が運ぶ豊富な水と肥沃な土砂は、稲作を中心とした農業の発展にも寄与してきました。盆地特有の寒暖差も作物の生育と食味には好条件で、キュウリやトマト、スイカなどの生産も盛んで、日本の食料供給基地になっています。

アイヌの伝承も残る神居古潭

旭川市の西端に位置する神居古潭は、石狩川が上川盆地から石狩平野へと流れる境に位置する峡谷です。アイヌ語で「神の里」を意味する聖地の一つで、川岸には約1億年前のプレート沈み込みに伴い形成された神居古潭

変成岩類が広く露出しています。アイヌの人々は丸木舟を使い、明治以降は鉄道を造り、人々は上川盆地につながるこの谷を利用して、行き来してきました。

この険しい峡谷は交通の難所でもあり、魔神が住んでいたというアイヌの伝承も残っています。川岸には「ニツネカムイ・サパ（魔神の頭）」や「ニツネカムイ・ネトパケ（魔神の胴体）」と呼ばれる岩があります。また、「ニツネカムイ・オ・ラオシマ・イ（魔神の足跡）」と呼ばれる大きな穴や大小の穴が見られます。これは岩のくぼみにたまった砂や小石が川の流れにより回転し、長い年月をかけて岩を削ってきたポットホール（おう穴）です。

日本ジオパーク認定を目指して

1市7町と教育・観光・環境保全の関連団体が構成する大雪山カムイミンタラジオパーク構想推進協議会は、日本ジオパーク認定を目指し、地域の自然や大地の歴史を体感するジオ・ツアーを開催しているほか、関係機関と連携した清掃活動などの各種取り組みを進めています。



当麻鐘乳洞を見学するジオ・ツアーの様子
（写真提供：大雪山カムイミンタラジオパーク構想推進協議会）

ほっかいどうの本

このコーナーは北海道の出版社から発行された本を社員が読み紹介しております。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。特記以外は税込価格です。

坂本先生とさわこの母

978-4-86721-131-1

坂本 勤／今 美幸 著
A5変型判 224頁 19800円
北海道新聞社 発行
011・210・5744



教育、障がい、戦争、子どものことをテーマに、さわこの母（重い障がいのある娘の母で主婦の今美幸さん）と坂本先生（『タマゴマン』は中学生）シリーズの著者で元国語教師の坂本勤さん）の手紙のやり取りをメインに本書は構成されています。

戦争という究極の暴力の対極には対話があり、全編にわたって人と人が言葉を交わして対話することの大切さが語られています。言葉が心をつくり、心が言葉を育みます。

考える力を奪う教育、人間を大事にしない教育が施されてしまうと、一人一人の小さい力が集結して戦争は引き起こされてしまうのだと、坂本先生は手紙の中で述べています。また、今さんは娘さわこさんを見つめ「通じることがうれしい。話せることがうれしい。まわりの人には大した言葉でないとしても、娘にとってはゆずれないことです」と綴っています。

そんな小さな「うれしい」を、誰かに届けられる言葉を育てたいと思える一冊です。

(システム部 米谷佑太)

命を守る 防災ふろしき

978-4-88115-432-5

よこやま よしえ さく・え
A5判 32頁 11000円
中西出版 発行
011・785・0737



災害大国と言われる日本において、もしもの時に備えて日頃から準備をしておくことが重要ではないでしょうか。

本書は「ふるしき」という身近にある日用品を題材に、カラフルで可愛らしいイラストを用いて防災に役立つ使い方をわかりやすく紹介した絵本です。ふるしきは日本に古くから伝わる文化ですが、近年では繰り返し色々な用途に使えるなど、環境問題への意識から価値が見直されています。さらに、防災の面でも活躍するなど新しい使い方に驚くばかりです。

親しみやすいキャラクターが紹介する包み方は、水を運んだり、靴がない時の代用にしたりと多岐にわたります。様々な状況に応じた使い方が学べ、シンプルながらも便利な結び方は、日常でも活用してみたいくなります。

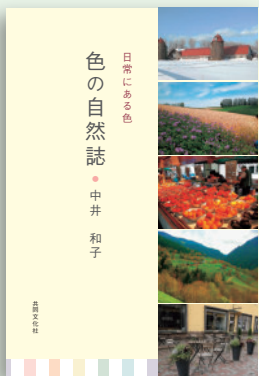
全体を通してイラストをメインに構成されているため、子どもでも楽しく遊び感覚で手順を覚えることができます。家族で防災について考えるきっかけにはいかがでしょうか。

(フリーエイション部 渡邊絢子)

日常にある色 色の自然誌

978-4-8739-405-9

中井 和子 著
A5判 202頁 22000円
共同文化社 発行
011・251・8078



灯台下暗し……暗いとも見えません。人類は光と物体と眼があることで、「色」を知覚してきました。しかし、「色」に関して多くの方が漠然としか認識していないのが、実情ではないでしょうか。

著者はこれまで道内の幾つかの大学で「景観」「環境デザイン」「色彩論」を担当してきました。本書は、私たちが日常生活で出会う「色」をテーマに、自然・人文・社会科学といった方面から「色」を紐解いています。

国内外の自然と文化を例に、人間の色彩感情の進化を振り返ります。写真や図が豊富に掲載され、分かりやすくまとめられた知識集です。

近年、デジタル化が進み身の回りには「光の色」があふれていますが、「物体の色」とは異なります。本書を読むことで、毎日の生活の中で遭遇している様々な「色」に関する事象に気が付くことでしょう。意識的に見ることで、その鮮やかさが増していきます。

(東京営業部 伊藤大夢)

新刊情報

書名の下の数値は日本図書コード(JISBN)及び雑誌コード。特記以外は税込価格。お近くの書店にない場合は発行先へお問い合わせください。

北海道 昭和の鉄道風景 懐かしの汽車旅

坂東 忠明 著
B5判 144頁
2200円

978-4-86721-138-7

宮島沼LOVE! ラムサール登録20年を越えて

宮島沼水鳥・湿地センター 編著
A5判 128頁
1870円

978-4-86721-138-6

続タウシユベツ川橋梁 あの幻の橋の物語

岩崎 量示 著
A4変型判 112頁
3300円

978-4-86721-134-2

さつぽろ探見 ちよつとタイプなまち歩き

杉浦 正人 著
A5判 192頁
1870円

978-4-86721-135-9

言葉の現在地 2017-2024

関口 裕士 著
四六判 368頁
1980円

978-4-86721-140-3

年表と写真で見る北海道の国鉄 電化から民営化まで

原田 伸一・杉山 茂
奥野 和弘・奥野 満希子 著
B5判 272頁
3630円

978-4-86721-143-4

特別報道写真集 パリオリンピック2024

共同通信社 編
A4判 192頁
1980円

978-4-86721-137-3

ももが行く ほっかいどつくいしん坊のスロー旅

すずき もも 著
A5変型判 112頁
1760円

978-4-86721-138-0

2025カレンダー しまえながのきもち

山本 光一 写真
149×212mm
14枚
1100円

978-4-86721-141-0

2025エゾモンガカレンダー もも日和

高橋 賢悟 写真
149×212mm
14枚
1100円

978-4-86721-142-7

カレンダー 北海道の鉄道風景2025

北海道新聞社 編
A3判 14枚
1540円

978-4-86721-144-1

道新プラス 道新受験情報2025 高校入試合格データ特集

北海道新聞社 編
B5判 220頁
990円

16747-08

プロが教えるクラゲ飼育図鑑

村井 貴史 編著
A5 264頁
7920円

978-4-8329-1413-1

北海道大学出版会

改訂版 さつぽろ喫茶店グラフィティ

和田 由美 著
四六判 152頁
1650円

978-4-906740-86-6

叙事詩 ホモ・サピエンスからの伝言

北尾 克三郎 著
四六判 156頁
2200円

978-4-906740-88-9

亜瑠西社

地域政策の新たな潮流を探る

小磯 修二 編著
四六判 316頁
1980円

978-4-8315-434-9

栄花の道 私の剣道人生

栄花 英幸 著
四六判 205頁
1980円

978-4-8315-435-6

中西出版

北海道殖民状況報文 十勝国支部

加藤 公夫 現代語訳
A5判 376頁
3800円

978-4-8328-2404-1

北海道出版企画センター

激動、昭和史の墓

合田 一道 著
A5判 288頁
2530円

978-4-909-281-61-6

寿郎社

成年後見法の道標1

三田 佳央 著
A5判 212頁
3300円

978-4-87739-410-3

夢遠の道のり シベリア抑留の記

山口 文晃 編
四六判 132頁
990円

978-4-87739-407-3

観光をわかりやすく考察する 關牛文化で紐解く無関心層を関心層に変えるプロセス

篠崎 宏 著
四六判 144頁
1650円

978-4-87739-411-0

共同文化社

紙のば 秋を彩るイチョウ並木

加藤 光浩 木版画 32.5センチ×41センチ
北海道大学の北13条門から西に伸びる長さ約380メートルの道路の両端に、70本のイチョウが植えられている並木がある。

10月下旬から11月上旬、黄金色に輝くイチョウ並木のアーチは圧巻であり、多くの市民や観光客が訪れる。

見ごろに合わせて行われる北大金葉祭では、イチョウ並木がライトアップされ、幻想的な景色が楽しめる。

厳しい冬の足音が聞こえてくると、晩秋を彩る黄金の並木道を歩きたくなる。

GEM木版画会 会員 札幌市在住



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。

URL <https://iword.co.jp>